DIALOG(R)File 351:Derwent WPI (c) 2002 Thomson Derwent. All rts. reserv. 007557858 WPI ACC No: 1988-191790/198828 XRAM ACC NO: C88-085557 Prodn. of polyester(s) by fermentation - using pseudomonas oleovorans, excess carbon source and limiting quantity of at least one other nutrients Patent Assignee: RIJKSUNIV GRONINGEN (UYGR-N); UNIV RIJKS TO GRONINGEN (UYRI-N) Inventor: LAGEVEEN R G; WITHOLT B Number of Countries: 011 Number of Patents: 009 Patent Family: Kind Date Patent No Applicat No Kind Week Date EP 274151 NL 8603073 19880713 EP 87202379 19871201 198828 Α Α 19880701 NL 863073 19861202 198830 Α JP 63226291 19880920 JP 87305516 19871202 198843 Α 19871201 us 5135859 19920804 us 87127216 199234 Δ. EP 274151 в1 19940316 EP 87202379 19871201 199411 DE 3789377 19940421 DE 3789377 19871201 G 199417 EP 87202379 19871201 Α us 5334698 Δ 19940802 US 87127216 Α 19871201 199430 us 91770180 19911002 Α 19950425 CA 553209 19871201 CA 1335370 Α 199524 JP 2642937 в2 19970820 JP 87305516 19871202 199738 Priority Applications (No Type Date): NL 863073 A 19861202 Cited Patents: 7.Jnl.Ref; A3...8830; EP 89039; JP 61070991; No-SR.Pub Patent Details: Filing Notes Patent No Kind Lan Pg Main IPC EP 274151 A F 27 Designated States (Regional): BE CH DE FR GB IT LI NL 5135859 EP 274151 B1 E 34 Designated States (Regional): BE CH DE FR GB IT LI NL DE 3789377 Based on patent EP 274151 G us 5334698 20 Div ex application US 87127216 Div ex patent US 5135859 JP 2642937 **B2** 16 Previous Publ. patent JP 63226291 Abstract (Basic): EP 274151 A A process for producing polyesters by aerobically culturing microorganisms with nutrient limitation is characterised by culturing Pseudomonas oleovorans (PO) bacteria under aerobic conditions in a nutrient medium contg. an excess of a carbon source, and a limiting quantity of at least one of the other nutrients essential for growth, the carbon source comprising at least one assimilable acyclic aliphatic hydrocarbon cpd. and if desired, recovering the biopolymer formed from the cells. USE/ADVANTAGE - The structure of the biopolymer can be easily controlled by selecting the substrate. Polyester type biopolymers can be produced with side chains whose length can be varied in an adjustable manner and which may contain a terminal double bond. Owing to the terminal double bonds, the resulting biopolymer can easily be chemically modified in a controllable percentage of the side chains or cross-linked with other polymer chains. The polyesters obtd. can be used to form e.g. sutures, films or skin or bone grafts, or can be hydrolysed to produce optically active carboxylic acids or esters. 0/8 Abstract (Equivalent): EP 274151 B A process for producing polyesters by aerobically culturing

micro-organisms with nutrient limitation, characterised by culturing

Page 1

JP-2642937

Pseudomonas oleovorans bacteria under aerobic conditions in a nutrient medium contg. an excess of a carbon source and a limiting quantity of at least one of the other nutrients essential for growth, and if desired recovering the biopolymer formed from the cells, the carbon source comprising at least one assimilable acyclic aliphatic hydrocarbon cpd. with the exclusion of n-octane. Dwg.1/8

Abstract (Equivalent): US 5334698 A

Optically-active polyester is isolated from Pseudomonas oleovorans cultured is a nutrient medium contg. 1 or more (6-7C) or (9-12C) paraffin prod. or 1 or more (6-12C) paraffin oxidn. prod. as carbon source.

Polyester has units other than exclusively 3-heptanoatetanoate) units shaving formula C(0)CH2CH2((CH2)mCH3)0, (where m is 2-8). USE - Used in prepn. of a suture, film, skin graft, or bone graft.

Dwg.1/8 US_5135859 A

Polyesters including units other than 3-hydroxyoctamoate are prepd. by aerobically culturing Pseudomonas oleovorans in a nutrient medium contg. excess C-source and a limiting amt. of 1 or more nutrient essential for growth. C-source comprises 1 or more (6-12C) paraffin or paraffin oxidn. prod. other than exclusively n-octane. The polyesters have the formula (I) where n=2-8. USE - For making sutures, films, skin or bone grafts. The hydrolysed polyester may also be used as a source of optically active acids.

(Dwg.3/8)Title Terms: PRODUCE; POLYESTER; FERMENTATION; PSEUDOMONAS; OLEOVORANS; EXCESS; CARBON; SOURCE; LIMIT; QUANTITY; ONE; NUTRIENT
Derwent Class: A23; A96; D16; D22; H04; P34
International Patent Class (Main): C08G-063/08; C12P-007/02; C12P-007/62

International Patent Class (Additional): A61L-015/00; A61L-017/00; A61L-027/00; C08G-063/06; C08G-063/52; C08L-067/02; C12P-007/42; C12P-041/00; C12P-007/62; C12R-001-38

File Segment: CPI; EngPI Manual Codes (CPI/A-N): A03-C02; A05-E02; A10-A; D09-C01D; D09-D; H04-E02 Plasdoc Codes (KS): 0230 1291 1990 2008 2020 2066 2069 2095 2410 2513 2579 2580 2590 2765 2768

Polymer Fragment Codes (PF):
001 014 04& 143 144 231 244 295 347 358 399 43& 435 473 516 519 575 58583 584 643 645 691 722

(51) Int.CL*

FΙ

广内整理番目

第2642937号

(45)発行日 平成9年(1997)8月20日

識別記号

(24)登録日 平成9年(1997)5月2日

技術表示信所

mentaling 1 11 targetter 1	r ı	父情衣不通灯	
	C12P 7/	62	
	A61L 17/	00	
	27/	00 C	
NLP	C08G 63/	06 NLP .	
NPD	63/	52 NPD	
		発明の数1(全16頁) 最終頁に続く	
特觀昭62-305516	(73)特許権者	909909999	
•		リジュクスユニバシテイト テ グロニ	
昭和62年(1987)12月2日		ンゲン	
		オランダ国 9712 ピーシー グロニン	
特開昭63-226291	ゲン, プロアストラット 5		
昭和63年(1988) 9月20日	(72)発明者 パーナード ウィゾルト		
8603073	オランダ国 9761 エィチアール エル		
1986年12月2日	デ,レンプラントヴェッグ 9		
オランダ(NL)	(72)発明者 ローランド ゲルハルト ラビゲーン		
		オランダ国 9726 ジーエル グロニン	
÷		ゲン, ファン ヘムスケルクストラッド	
		24	
	(74)代理人	弁理士 山本 秀策	
	審查官	新見 浩一	
	(56)参考文献	J. Bacteriol 154 (2)	
• •		P. 870-878 (1983)	
	NPD 特顧昭62-305516 昭和62年(1987)12月2日 特開昭63-226291 昭和63年(1988)9月20日 8603073	C12P 7/A61L 17/27/NLP C08G 63/NPD 63/NPD 63/ 特顧昭62-305516 (73)特許権者 昭和62年(1987)12月2日 (73)特許権者 昭和63年(1988)9月20日 8603073 1986年12月2日 オランダ (NL) (72)発明者 (74)代理人	

(54) 【発明の名称】 酵素によるポリエステルの製造方法、光学活性カルボン酸およびエステルの製造方法、およびボ リエステルを含む製品

(57)【特許請求の範囲】

【請求項1】微生物を栄養源制限下で好気的に培養する ことによって、ポリエステルを製造する方法であって、 シュードモナス オレオボランス細菌を好気条件下で、 少なくとも1種の資化可能な非環状脂肪族炭化水素化合 物を含有する炭素源の過剰量と、生育に必須の他の栄養 源の少なくとも1種の制限量とを含有する栄養培地で培 養すること:および

必要に応じて、形成されたバイオポリマーを該細胞から*

ンを除く、

ただし、1種類の炭素源のみを用いる場合は n-オクタ

を包含する方法。

*回収すること、

【請求項2】次の構造式(1)を有する単位から構成さ れるポリエステルを、6~12個の炭素原子を有するパラ フィンまたはパラフィン酸化物を1種またはそれ以上含 有する炭素源を用いることによって、生産することを特 徴とする特許請求の範囲第1項に記載の方法:

(1)

ここで、mは2~8の整数である。

※を、6~12個の炭素原子を有する非分岐1-オレフィン 【請求項3】次の構造式(1)を有する単位と次の構造 の1種またはそれ以上を含有する炭素源を用いることに 式(2)を有する単位とから構成されるボリエステル ※ よって、生産することを特徴とする特許請求の範囲第1

3

項に記載の方法:

ここで、mは2~8の整数である。

【請求項4】次の構造式(1)を有する単位と次の構造 式(2)を有する単位とから構成されるポリエステル を、6~12個の炭素原子を有する非分岐1-オレフィン の1種またはそれ以上と、6~12個の炭素原子を有する*

* 非分岐パラフィンまたはパラフィン酸化物の1種または それ以上含有する炭素源を用いることによって、生産す 10 ることを特徴とする特許請求の範囲第1項に記載の方

4

ここで、mは2~8の整数である。

上の基質を用いることによって、 側鎖が3個の炭素原子 を有する (m=2) ポリエステルを生産することを特徴 とする特許請求の範囲第2項から第4項のいずれか1つ に記載の方法。

【請求項6】7個の炭素原子を有する1種またはそれ以 上の基質を用いることによって、側鎖が4個の炭素原子 を有する (m=3) ポリエステルを生産することを特徴 とする特許請求の範囲第2項から第4項のいずれか1つ に記載の方法。

上の基質と、7個の炭素原子を有する1種またはそれ以 上の基質とを用いることによって、側鎖が3個および4 個の炭素原子を有する (m=2および3) 共重合ポリエ ステルを生産することを特徴とする特許請求の範囲第2 項から第4項のいずれか1つに記載の方法。

【請求項8】8個の炭素原子を有する1種またはそれ以 上の基質を、必要に応じて、6個の炭素原子を有する1 種またはそれ以上の基質と組み合わせて用いることによ って、側鎖が3個および5個の炭素原子を有する(m= 2および4) 共重合ポリエステルを生産することを特徴 40 とする特許請求の範囲第2項から第4項のいずれか1つ に記載の方法。

【請求項9】7個の炭素原子を有する1種またはそれ以 上の基質と、8個の炭素原子を有する1種またはそれ以 上の基質とを、必要に応じて、6個の酸素原子を有する 1種またはそれ以上の基質と組み合わせて用いることに よって、側鎖が3個、4個および5個の炭素原子を有す る (m=2、3および4) 共重合ホリエステルを生産す ることを特徴とする特許請求の範囲第2項から第4項の いずれか1つに記載の方法。

※【請求項10】9個の炭素原子を有する1種またはそれ 【請求項5】6個の炭素原子を有する1種またはそれ以 20 以上の基質を、必要に応じて、7個の炭素原子を有する 1種またはそれ以上の基質と組み合わせて用いることに よって、側鎖が4個および6個の炭素原子を有する (m =3および5) 共重合ポリエステルを生産することを特 徴とする特許請求の範囲第2項から第4項のいずれか1 つに記載の方法。

【請求項11】8個の炭素原子を有する1種またはそれ 以上の基質と、9個の炭素原子を有する1種またはそれ 以上の基質とを、必要に応じて、6個および/または7 個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質と組み 【請求項7】6個の炭素原子を有する1種またはそれ以 30 合わせて用いることによって、側鎖が3個、4個、5個 および6個の炭素原子を有する(m=2、3、4および 5) 共重合ポリエステルを生産することを特徴とする特 許請求の範囲第2項から第4項のいずれか1つに記載の 方法。

> 【請求項12】10個の炭素原子を有する1種またはそれ 以上の基質を、必要に応じて、6個および/または8個 の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質と組み合 わせて用いることによって、側鎖が3個、5個および7 個の炭素原子を有する(m=2、4および6)共重合ポ リエステルを生産することを特徴とする特許請求の範囲 第2項から第4項のいずれか1つに記載の方法。

【請求項13】9個の炭素原子を有する1種またはそれ 以上の基質と、10個の炭素原子を有する1種またはそれ 以上の基質とを、必要に応じて、6個、7個および/ま たは8個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質 と粗み合わせて用いることによって、側鎖が3個、4 個、5個、6個および7個の炭素原子を有する (m= 2、3、4、5および6)共重合ポリエステルを生産す ることを特徴とする特許請求の範囲第2項から第4項の ※50 いずれか1つに記載の方法。

BEST AVAILABLE COPY

【請求項14】11個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質を、必要に応じて、7個および/または9個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質と組み合わせて用いることによって、側鎖が4個、6個および8個の炭素原子を有する(m=6、5および7)共重合ポリエステルを生産することを特徴とする特許請求の範囲第2項から第4項のいずれか1つに記載の方法。

【請求項15】10個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質と、11個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質とを、必要に応じて、6個、7個、8個およ 10 び/または9個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質と組み合わせて用いることによって、側鎖が3個、4個、5個、6個、7個および8個の炭素原子を有する(m=2、3、4、5、6および7)共重合ポリエステルを生産することを特徴とする特許請求の範囲第2項から第4項のいずれか1つに記載の方法。

【請求項16】12個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質を、必要に応じて、6個、8個および/または10個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質と組み合わせて用いることによって、側鎖が3個、5個、7個および/または9個の炭素原子を有する(m=2、4、6および8)共重合ポリエステルを生産することを特徴とする特許請求の範囲第2項から第4項のいずれか1つに記載の方法。

【請求項17】11個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質と、12個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質とを、必要に応じて、6個、7個、8個、9個および/または10個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質と組み合わせて用いることによって、側鎖が3個、4個、5個、6個、7個、8個および9個の炭 30素原子を有する(m=2、3、4、5、6、7および8)共重合ポリエステルを生産することを特徴とする特許請求の範囲第2項から第4項のいずれか1つに記載の方法。

【請求項18】7~11個の炭素原子を有する1種または それ以上の基質を用いることを特徴とする特許請求の範 囲第2項から第4項のいずれか1つに記載の方法。

【請求項19】8~10個の炭素原子を有する1種または それ以上の基質を用いることを特徴とする特計請求の範 囲第2項から第4項のいずれか1つに記載の方法。

【請求項20】窒素またはリン制限で前記好気培養を行うことを特徴とする特許請求の範囲第1項から第19項のいずれか1つに記載の方法。

【請求項21】窒素制限で前記好気培養を行うことを特徴とする特許請求の範囲第1項から第20項のいずれか1つに記載の方法。

【請求項22】前記好気培養が、pH5~9、好ましくは 約7にて、および37℃を下まわる温度、好ましくは約30 ℃で行われることを特徴とする特許請求の範囲第1項か ら第21項のいずれか1つに記載の方法。 【請求項23】前記好気培養が、好ましくは空気による 飽和の約50%の溶存酸素分圧で、十分に撹拌して行われ ることを特徴とする特許請求の範囲第1項から第22項の いずれか1つに記載の方法。

6

【請求項24】前記好気培養が、二液相系で行われることを特徴とする特許請求の範囲第1項から第23項のいずれか1つに記載の方法。

【請求項25】栄養源制限による前記好気培養が、細胞密度が少なくとも2g/1に達する、栄養源制限なしの対数増殖期後に、行なわれることを特徴とする特許請求の範囲第1項から第24項のいずれか1つに記載の方法。

【請求項26】栄養源制限による定常期に形成される前 記パイオポリマー含有細胞が、該細胞のバイオポリマー 含有の顕著な低下が起こる前に、採取されることを特徴 とする特許請求の範囲第1項から第25項のいずれか1つ に記載の方法。

【請求項27】前記バイオポリマーが、前記採取細胞をスフェロプラストへ変換し、音波振動処理によってこれらを破砕し;そして遠心分離した後に形成される最上層を分離し;さらに必要に応じて、洗浄と乾燥を行うこと、によって単離されることを特徴とする特許請求の範囲第1項から第26項のいずれか1つに記載の方法。

【請求項28】前記バイオポリマーが、化学的に修飾されることを特徴とする特許請求の範囲第1項から第27項のいずれか1つに記載の方法。

【請求項29】光学的に活性なカルボン酸またはエステルを製造する方法であって、

特許請求の範囲第1項から第28項のいずれか1つに記載 の方法により生産されるポリエステルを加水分解すること;および

必要に応じて、得られたモノマーをエステル化することを特徴とする方法。

【発明の詳細な説明】

(産業上の利用分野)

本発明は、栄養源制限下における微生物の好気的培養によるポリエステルの製造方法に関する。

(従来の技術)

このタイプの方法はヨーロッパ特許公開公報第001566 9号に開示されている。そこでは、PHBと呼ばれるポリ

40 (3-ヒドロキシ酪酸)の調製が述べられている。この 調製は、あるメチロバクテリウム オルガノフィラム (Methylobacterium organopnilum)株の栄養制限下、 特に窒素および/またはリンの制限下における好気培養 による。使用し得る炭素源は、安価なメタノールでああ る。他の微生物もまたPHBの製造を目的として提案され ている。それには例えば、ローロッパ特許公開公報第00 46344号に開示されているアルカリゲネス (Alcaligene s)種およびAppl.Microbiol.Biotechnol.23 (1986) 332 -329に記述のあるシュードモナス (Pseudomonas)株が 50 ある。

微生物学的手段により生産されるPHBは、正分解性で あり、式-CO-CH2-CH (CH3) -O-を有する単位から 構成される光学活性のポリエステルである。このバイオ ボリマーは非常に興味深い性質を有しており、そして、 多くの用途に用いられ得る。このポリマーは他の熱可塑 性プラスチックと同様に型に入れ成型でき,無機充填剤 で補強でき、繊維に紡ぐことができ、そして良好な気体 遮断特性を有するフィルムの調製に使用できる。この生 分解性のPHBは,非生分解性のポリマーとともに混合ポ リマー形に変換できる。具体的な利用には、PHBによる外 10 1,2-エポキサイドの形成である。 科用糸および人工皮膚または人工骨の調製がある。ま た、光学活性PHBは、光学活性モノマーに変換され得 (それは化学的手段によっては光学的に純粋な形には容 易に製造することがでない),有機化学的変換,例えば 薬剤の合成、の適当な出発材料となる。

しかし、PHBの欠点は、このポリマーの化学構造の変更 が容易ではないということである。この欠点は、米国特 許第4.477.654号によれば,アルカリゲネス種の好気培 養を,少なくとも一部においては,カルボン酸(例えば プロピオン酸), またはアルカリ金属塩またはその低級 20 アルキルエステルの存在下で、行うことにより回避でき る。このようにして形成されたバイオポリマーは、構造 式-00-CH2-CH (CH3)-O-を有する3-ヒドロキシ 酪酸エステル残基と、構造式-00-CH2-CH(C2店)-〇ーを有する残基のような他のヒドロキシ酸残基 (50モ ル%を下回る)から形成される。しかし、この既知の方 法においても,変更の可能性は極めて制限されている。 (発明の構成)

本発明者が属している研究グループは,シュードモナ ス オレオボランス (Pseudomonas olovorans)種の傲 30 生物の研究を行っている。種々のシュードモナス種は炭 素源として直鎖または芳香族炭化水素を用いることによ り生育でき、資化は炭素付加で始まる。この酸素付加は オキシゲナーゼにより触媒され、この遺伝情報は大部分 プラスミドに関係している。そのプラスミドは,既知の OCT, CAM, TOL, XYL, SAL, およびNAHプラスミドであり、そ れぞれ6~12個の炭素原子を含むn-アルカン;カンフ ァー;トルエン,=ーキシレンおよびpーキシレン;サリ チル酸塩;およびナフタレンの分解の第1段階を行うこ*

$$\begin{array}{cccc}
0 & (CH_2) \text{ mCH}_3 \\
-C - CH_2 - CH - 0 - - & - & - & - \\
\end{array}$$

(ここで,mは2~8の整数である。)

この生産は、6~12個の炭素原子を含む1種またはそれ 以上のパラフィン、またはパラフィン酸化物をを含む炭 素源を用いて行われる。ここで使用される"パラフィン 酸化物" という用語は,アルカノール,アルカナール, およびアルカン酸を意味し、それらはパラフィン分解の 中間体として生じる。これら他の基質は、シュードモナ ス オレオボランス株をOCTプラスミドが存在しない状 ※50 *とができる。 モノオキシゲナーゼωーヒドロキシラーゼ をコードするOCTプラスミドを含むシュードモナス オ レオボランス株は、6~12個の炭素原子を含む n-アルカ ンで生育し得る。なぜなら、末端のメチル基はヒドロキ シル基に変換され、その後、そのアルデヒドおよびその カルボン酸を経て変換され,正常な代謝に適合する産物 を生じる。 これらの株はまた,1-オクテンおよび1,7-オクタジエンのような種々の不飽和炭化水素に生育でき ることが見出されており,その第1の段階は,しばしば

8

De Smetらが, J. Bacteriol . 154 (1983) 870-878で述 べているように、シュードモナス オレオボランスTF4 −1L (ATCC 29347) の,20~50% (V/V) のn −オクタン を含む栄養培地での培養において、細胞中には封入体が 存在した。この封入体は、例えばバチルス セレウス (Bacillus cereus) の既知のポリーβーヒドロキシ酪 酸エステル封入体に似た封入体である。さらに、これら の封入体は少なくとも一部は構造式-CO-CHz-CH(Co H 11)-O-を有するβ-ヒドロキシオクタン酸エステル の単位から構成されるポリマー物質を含んでいることが 示された。

広範囲のポリエステル型のバイオポリマーがシュード モナス オレオボランス細菌の好気培養で製造され得る ことが,現在では見出されている。そして,これが本発 明の本質である。この方法においては,このバイオポリ マーの化学構造または組成が基質を選ぶことにより容易 に制御され得る。本発明においては、側鎖の長さが調節 され得,そして,所望の位置に末端二重結合を有するポ リエステル型バイオポリマーの生産が可能となる。

本発明方法では,シュードモナス オレオボランス細 菌を,過剰の炭素源と生育に必須の他の栄養源の少なく とも1種の制限量とを含有する栄養培地で、好気条件下 にて培養することを特徴とする。上記炭素源は、少なく とも1種の資化可能な非環式脂肪族炭化水素合号物を含 み,そして必要に応じて形成されたバイオポリマーを細 胞から回収する。

飽和側鎖を含むバイボリマーのみを生ずる本発明の方 法は,構造式(1)を有する単位から構成されるポリエ ステルの生産によって特徴づけられる。

(1)

※態で、そして少なくとも活性パルフィンヒドロキシラー ゼが存在しない状態で用いられる場合に,特に好適であ るパラフィン酸化物の炭素原子数は,あるいは,6~12個 の範囲を外れる範囲(例えば4個または4個の炭素原 子) であり得る。 なぜなら,パラフィンの6~12個とい う炭素原子の制限は、パラフィンーヒドロキシラーゼ系 の制限に関係するためである。

パラフィン(またはパラフィン酸化物)は、好ましく

は、側鎖のない化合物であるが、側鎖のある化合物も同 様に用いられ得、ポリマーになり得る。

飽和および不飽和側鎖の両方を含むポリマーを生産す*

* る本発明の方法は、構造式(1)を有する単位と構造式 (2)を有る単位とで構成されるポリエステルの生産に よって特徴づけられる。

10

(ここで、頭は2~8の整数である。)

この生産は、6~12個の炭素原子を含み、側鎖を持たな い1種またはそれ以上の1-アルケン、および必要に応 じて6~12個の炭素原子を含み、側鎖を持たない1種ま たはそれ以上のパラフィンまたはパラフィン酸化物を含 む炭素源を用いて行われる。1-アルケンを唯一の炭素 源として用いる場合においても、生成するバイオポリマ 一の側鎖の一部は飽和している。しかし、飽和および不 飽和側鎖の比率は、基質の混合物(例えばオクタンおよ びオクテン)を用いることにより変化させ得る。

二重結合のために、得られるバイオポリマーは側鎖の割 合を制御して化学的に容易に修飾または他のボリマー鎖 と架橋し得る。

本発明の好適な実施態様は、6個の炭素原子を有する1 種またはそれ以上の基質を用いて、側鎖が3個の原子を 有する (m=2) ポリエステルを生産することにより特 徴づけられる。 ヘキセン、 またはヘキセンおよびヘキサ ンを含む基質を用いる場合には、バイオポリマーの側鎖 の一部は末端二重結合を含む。

本発明の他の好適な実施態様は、7個の炭素原子を有す 30 る1種またはそれ以上の基質を用い、側鎖が4個の炭素 原子を有する(m=3)ポリエステルを調製することに より特徴づけられる。側鎖の一部に末端二重結合を有す るポリエステルは、用いられる基質がヘプテン、または ヘプテンおよびヘプタンである場合に得られる。

上記の好適な実施態様は両者とも、本質的に、全ての 側鎖が同数の炭素原子を有するポリエステルの生産であ る。以下に述べる好適な実施態様は、そのような例では

本発明のそのような好適な実施態様は、6個の炭素原子 を有する1種またはそれ以上の基質と7個の炭素原子を 有する1種またはそれ以上の基質を用い、側鎖が3個お よび4個の炭素原子を有する(m=2および3)共重合 ボリエステルの生産により特徴づけられる。これらおよ び全ての他の実施態様において、基質の選択およびその お互いの比率の両者において多くの変更が可能であり、 そして、これらの変更は、バイオポリマーにおける種々 の側鎖の比率を事実上無限に変えることができる。従っ てこの実施態様においては、次の組合せが用いられ得 る:ヘキサンおよびヘプタン:ヘキセンおよびヘプテ ※50 産することにより特徴づけられる。

10%ン; ヘキサンおよびヘアタン; ヘキセンおよびヘアタ ン; ヘキサン, ヘキセンおよびヘプタン; ヘキサン, ヘ キセンおよびヘプテン;ヘキサン,ヘプタンおよびヘプ テン;ヘキセン,ヘプタンおよびヘプテン;そしてヘキ サン,ヘキセン,ヘプタンおよびヘプテン。そして.こ れらの組合せのそれぞれにおいて、種類の基質間の比率 は所望の値に選択することができる。

他の実施態様は、8個の炭素原子を有する1種またはそ れ以上の基質、そして、必要に応じて6個の炭素原子を 有する1種またはそれ以上の基質と組合せて用いて、 側 本発明のこの変法は、特に利点を有している。末端の 20 鎖が3個および5個の炭素原子を有する(m = 2 および 4) 共重合ポリエステルを生産することにより特徴づけ られる。好適な基質は1-オクテンであり、必要に応じ てオクタン,ヘキサンおよび/またはヘキセンが組合せ て用いられる。

> 次に、好適な実施態様は、7個の炭素原子を有する1種 またはそれ以上の基質と8個の炭素原子を有する1種ま たはそれ以上の基質を,必要に応じて6個の炭素原子を 有する1種またはそれ以上の基質と組合せて用い、側鎖 が3個,4個および5個の炭素原子を有する(m=2.3.お よび4) 共重合ポリエステルを生産することにより特徴 づけられる。

> さらに好適な実施態様は.9個の炭素原子を有する1種 またはそれ以上の基質を,必要に応じて7個の炭素原子 を有する1種またはそれ以上の基質と組合せて用い、 側 鎖が4個および6個の炭素原子を有する(m=3および 5) 共重合ポリエステルを生産することにより特徴づけ sha.

さらに他の好適な実施態様は、8個の炭素原子を有する 1種またはそれ以上の基質と9個の炭素原子を有する1 種またはそれ以上の基質とを、必要に応じて、6個および /または7個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の 基質と組合せて用い,側鎖が3個,4個,5個および6個の 炭素原子を有する(m =2,3,4および5)共重合ポリエ ステルを生産することにより特徴づけられる.

次の好適な実施態様は、10個の炭素原子を有する1種 またはそれ以上の基質を、必要に応じて6個および/ま たは8個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質 と粗合せて用い,側鎖が3個,5個および7個の炭素原子 を有する(m=2,4および6)共重合ポリエステルを生

さらに好適な実施態様は、9個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質と、10個の炭素原子を有する1種またはれ以上の基質とを、必要に応じて、6個、7個および/または8個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質と組合せて用い、側鎖が3個、4個、5個、6個および7個の炭素原子を有する(m=2、3、4、5および6)共重合ポリエステルを生産することにより特徴づけられる。

さらに他の好適な実施態様は、11個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質を、必要に応じて7個および/または9個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質と組合せて、側鎖が4個、6個および8個の炭素原子を有する(m=3,5および7)共重合ポリエステルを生産することにより特徴づけられる。しかし、他の好適な実施態様は、10個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質を、必要に応じて6個、7個、8個、および/または9個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質と組合せて用い、側鎖が3個、4個、5個、6個、7個および8個の炭素原子を有する(m=2,3,4,5,6および7)共重合ポリエステルを生産することにより特徴づけられる。

次の好適な実施態様は、12個の炭素原子を有する1種 20 またはそれ以上の基質を、必要に応じて6個、8個および/または10個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質と粗合せて用い、側鎖が3個、5個、7個および9個の炭素原子を有する(m=2,4.6および8)共重合ポリエステルを生産することにより特徴づけられる。さらに好適な実施態様は、11個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質と、12個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質とを、必要に応じて6個、7個、8個、9個および/または10個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質と組合せて用い、側鎖が3個、4個、5個、6個、7個、8 30 個および9個の炭素原子を有する(m=2,3,4,5,6.7および8)共重合ポリエステルを生産することにより特徴づけられる。

本発明によれば、好ましくは7~11個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質、最も好ましくは8~10個の炭素原子を有する1種またはそれ以上の基質が用いられる。このようにして、最大量のポリマーが細胞内に得られる。

シュードモナス オレオボランス細菌の好気培養が達成される様式および条件は当業者には既知である。培養は、回分法または連続法が有効であり得る。この好気培養は、PH5~9、好ましくは約7において37℃以下の温度、好ましくは約30℃において行われ、そしてこの好気培養は、落存酸素圧が好ましくは空気飽和の約50%を越える値であり、十分な撹拌を行うことにより行われることが推奨される。

この好気培養は2液系で行うことができ、そして、それが望ましい。2液系の相のうちのひつとは、水溶性栄養源および上記細菌を含む水相であり、そして他方は基質の炭化水素を含む非極性相である。

1 2

上に述べたPHB生産微生物の場合のように、このシュードモナス オレオボランスは生育に必須の栄養源の1つが枯渇するまでは、有意な量のポリマーを生産しない。適当な栄養源の制限は、例えば、窒素、リン酸、イオウおよびマグネシウムの制限であるが、これらのうち、Nの制限およびPの制限が高ポリマー収量という観点からは好ましい。これらのうち、Nの制限が実際に容易に行われ、その理由から最も好適である。

実際にはこの方法は、通常、細胞密度が少なくても28 10 / Lに達するまで栄養源制限なして対数増殖を行い、次 に栄養源を制限した好気培養を行うような方法である。

バイオポリマー中に封入体が形成される定常期はあまり長く続けてはならない。なぜならば最大値に達した後、このポリマーの濃度は再び減少するからである。従って、好ましくは、栄養源制限で定常期に形成されたバイオポリマー含有細胞は、細胞中のバイオポリマー含有の有意な低下が起こる前に、集菌される。

細菌に含まれているバイオボリマーは必ずしも単離す る必要がない。なぜならば、バイオポリマー封入体を有 する細菌細胞を、例えば米国特許第3,107,172号に開示 されているように,直接用いることができるためであ る。しかし、大部分の用途には、このポリマーの単離精 製することが望ましいか,もしくは必要である。この目 的のために,多くの既知方法が採用され得る。この細菌 細胞は、当業者に既知の多くの方法で破砕され得る。例 えば,剪断力を用いること(ホモジナイザー,グライン ダー, いわゆる"フレンチプレス"など), 浸透圧ショ ック処理を用いること,音波または超音波振動を用いる こと,酵素的細胞壁分解を行うこと,または細胞懸濁液 をスプレードライすることが採用され得る。ついで、ポ リマーは、多くの既知方法により他の成分から分離され 得る。それには,例えば,溶剤抽出および遠心分離によ る方法がある、適当な分離方法の1つは上述のDe Smet らの報告に述べられており、それによれば等密度遠心分 離が用いられる。 大規模スケールでバイオポリマーを単 離するには,次の方法が好適である。まず,集菌した細 胞をスフェロプラストにし、音波振動処理で破砕し、そ して遠心後上層を分離し、さらに必要に応じて洗浄と乾 燥を行う。好ましくは、スフェロプラストへの変換は、 蔗糖の存在下において行うことが有効である。遠心分離 は,10,000gで約30分間行えば充分である。ポリマーはそ こで上清に白い最上層を形成し、容易に分離できる。混 入物は洗浄により除去でき,そして,洗浄されたポリマ 一を適当な方法で乾燥、好ましくは凍結乾燥に付す。

非常に好適な他の単離法は次のとおりである。まず、 細胞を連結遠心分離により集菌し、つぎに凍結乾燥する。乾燥細胞を、例えばクロロホルムに懸濁し、次に還流条件下で、例えば4時間にわたり抽出を行う。冷却後、懸濁液を浄過し、例えば50~100mlの容量までエボ50 パレートする。得られたポリマー溶液は、このポリエス テル以外に大量の脂質および脂肪酸を含有する。これらを、例えば、10倍量のエタノール中でポリマーを沈澱させることにより除去する。ポリマーが沈澱後、上澄をデカンテーションで除き、ポリマーの沈澱を圧縮空気を上に流すことにより乾燥させる。ポリマーを次に、好ましくは、できるだけ少量のクロロホルムに溶解させ、ついでデ過後、10倍量のエタノールで再沈澱させる。得られた沈澱を再び最小容量のクロロホルムに溶解させ、その後、上記溶液を鋳型に注ぎ、蒸発させることにより、合成プラスチック材が得られる。蒸発はこの材料を真空下 10でしばらくの間50℃に保持することにより促進され得る。

このようにして得られるポリエステルは、該ポリエス テルから、その全体または一部が構成される、縫糸、フィルム、皮膚、または骨移植材などの製品に利用され得る。

上記PHBについて記載した利用はまた、本発明により生産されたボリエステルにも適用される。特に注目されるのは、得られたバイオボリマーを化学的に修飾する可能性であり、この可能性はこのボリエステルが未端に二重結合を有する側鎖を含む場合に、特にうまく実現される。他のボリマー鎖との架橋もまた可能である。

本発明はまた、光学的に活性なカルボン酸またはエステルを生産する方法を提供し、それは、本発明により生産されたポリエステルの加水分解、および必要に応じて行われる生じたモノマーのエステル化により特徴づけられる。上述のように、そのような光学活性化合物は、化学的手段を用いた場合は、光学的に純粋な形では容易に得られない。本発明は従って、そのような光学的に純粋な化合物の製造を容易に達成する方法を提供する。それない合物の製造を容易に達成する方法を提供する。それないは例えば、薬剤の製造における中間体、または純粋に科学的なおよび/または応用を指向した研究への利用性があり得る。使用した基質の相異により、このプロセスにより異なったモノマーが生じた場合には、必要に応じてこれらは既知方法(モノマーの鎖長および/または飽和度の違いを利用した方法)により分離され得る。

本発明は、次の実験により詳述される。

1.バイオポリマーの構造

オクタンによる生育の間のシュードモナス オレオボランスによる重合物質の生合成は、1983年にDe Smetらにより初めて示された。このボリマーは、メタノリシスされたモノマーの元素分析、赤外吸収スペクトル、およびガスクロマトグラフィーにより、ボリー3ーヒドロキシブチレート様 (PHA) ボリエステル、おそらくボリー3ーヒドロキシオクタノエートと同定された。その後、3つの同定化合物が、有機化学的な経路で合成され(Ketelaarら、Tetrahedron Letters 26 (1985)、4665-4668)、その後このボリマーの絶対構造の決定が可能となった。

メタノリシスされたモノマーと, 合成された (S) -3-ヒドロキシヘキサノエート メチルエステル, 14

(S) - 3 - ヒドロキシオクタノエート、メチルエステル、および(S) - 3 - ヒドロキシデカノエート メチルエステルとを比較することによって、シュードモナスオレオボランスによりオクタンで生育後に形成されるボリマーは、(R) - 3 - ヒドロキシヘキサノエートおよび(R) - 3 - ヒドロキシオクタノエートから成ることが確立された。オクタンでの生育後に形成されるボリマーの一般的な構造式を第1図に示す。第1図において、Rはアルキル基- (CH2) a-1 - CH= CH2、を示し、ここでmは2~8整数である。基質としてオクタンを用いる場合には、バイオボリマーは、モノマーR) - 3 - ヒドロキシヘキサン酸エステル(R=C3H1)と、(R) - 3 - ヒドロキシオクタン酸エステル(R=C3H1)との共重合体である。

形成される他のポリマーにおけるモノマーの同定(以下参照)は、そのポリマーの酸メタノリシスが有効であり、その後精製したモノマーのメチルエステルを、ガスクロマトグラフィーと連結したマススペクトロメトリーで分析した。

20 2.分析

細胞内に貯蔵されるポリマーの形成に関する反応動力学を分析するために、ポリマーの量を短時間で少量の培養試料(バイオマス)で測定し得る手段を用いて、再現性のある方法を開発した。この方法は、微生物バイオマス中のポリー3ーヒドロキシブチレートの測定に対するBrauneggら(Eur.J.Microbiol.Biotechnol.6(1978)29-37)の方法に基づいて開発した。

その方法によると、細胞培養の全試料を同時に加水分 解とメタノリシスを行い、その後ポリマーから形成され たモノマーのメチルエステルを, ガスクロマトグラフィ ーで分析する。2つのピークの典型的なガスクロマトグ ラフィーとマススペクトルを第2図に示す。第2図Aは オクタンで培養した細胞の分析後のGLCパターンを示 す。矢印で示すピークは重合物質に由来する。 t=5分 のピークは内部標準(安息香酸メチルエステル)であ る。第2図Bは最も重要なGLCピークのMSパターンを示 す。175におけるピークは3-ヒドロキシオクタン酸メ チルエステルモノマーのプロトン化型であり、192におけ るピークはNHs-3-ヒドロキシオクタン酸メチルエス テルを示す。第2図Cは、より小さいGLCピークのMSパ ターンを示す。147および164におけるピークはそれぞれ 3-ヒドロキシヘキサン酸メチルエステルのプロトン化 誘導休およびアンモニウム誘導休を示す。

この方法をシュードモナスのポリマーに対して開発するために、nーオクタンによるシュードモナス オレオポランスの定常期培養の同一細胞試料を、100℃にて様々な時間により、そしてメタノール中における種々の濃度の硫酸で加水分解を行った(第3図)。第3図は、オクタンで生産されたバイオポリマーの加水分解時およびメタ フリシス時におけるインキュベーションの時間および硫

酸濃度の,バイオポリマー量に対する効果を示すグラフ である。測定には同一の細胞ペレットが用いられた。抽 出時間をさらに最適化し、GLC試料の乾燥操作を導入した 後、分析を以下のようにプログラムた:

0.1~4.0ml容量の細胞試料をエッペンドルフ遠心管で3 分間遠心分離し,次いで上清を除去し,ペレットを凍結 乾燥する。ついで,この凍結乾燥ペレットを15% (V/ V) の硫酸を含むメタノール溶液2mlに再懸濁し,2mlのク ロロホルムを加える。ネジ蓋のある試験管で、これら試 しながら、インキュベートする。試料を氷上で冷却後、 1.0回の水を加え、モノマー化したメチルエステルを、 試験管の内容物を20秒間ボルテックスミキサーにかけて 抽出する。遠心分離(5分間,4000×g)で層分離をを 促進させた後、水層を除き、有機層を無水Na₂SO₄上で乾 燥する。次いで,これら試料を,内部標準として安息香 酸メチルエステルを用いてガスクロマトグラフィーにか ける。

この分析の直線性を第4図に示す。この分析による と、試料あたり9mgのバイオポリマーまで、この反応は 一次反応である。

3.生育の間におけるバイオボリマーの生成および窒素制

第9項を除く全ての実験は、シュードモナス「オレオ ボランスTF4-1L (ATCC 29347) を用いて行った。

醗酵には、シュードモナス オレオボランスを,250ml のエーレンマイヤーフラスコ中で、2%オクタンを含む50 mlのF培地により、30℃にて振盪プレート (200rpm) 上 で16時間(一晩)前培養した。E培地は,以下の組成で ある:

	g/ t		
	g/ 2		
NaNH4 • HPO4 • 4H2O 3.5	3.58/ €		
K ₂ PHO ₄ 10.0	g/ t		
1000* MT	1 ml/ &		
1000* MTは、1N HC1中の胞子成分の溶液であり	他の成		

分を殺菌した後に加える。1000* MTは、以下の組成であ z .

5 .	
FeSO ₄ · 7H ₂ O	2.78g/ &
MNC12 · 4H2 O	1.98g/ t
CoSO ₄ · 7H ₂ O	2.81g/ &
CaCl ₂ · 2H ₂ O	1.47g/ &
CuC12 · 2H2O	0.17g/ 2
ZnSO ₄ · 7H ₂ O	0.298/ 2

を1N HC1に溶解する。

本培養は、14の醗酵槽(連結攪拌タンク反応容器、🖒 TR)に500mlのE * 培地を入れ、生育の最適値であるpH 6.9に維持して, コンピューター制御で5% NHsと1N Hz SO4を加えて行った。醗酵の間、酵素分圧(溶存酸素分

16 ター制御バルブを用いて維持した。培地は,600rpmの速 度で撹拌した。

E* 培地は、以下の組成を有する:

K₂ PHO₄ · 3H₂O 7.5g/ L NaNH4 PHO4 · 4H2 O 3.58/ 2 KH2 PO4 3.78/€ 1000 * MT 1 ml/2 100mM MgSD4 10 m1/#

1000* MTと殺菌MgSO4溶液のみを、他の成分を殺菌した 料を100℃で140分間,マググネティクスターラーで撹拌 10 後に加えた。単一炭素源およびエネルギー源として、10 ~20% (V/V) のオクタンを加えた。この培地をアンモ ニアによるHI満定と組合せて用いると、6.5mg/mlの細胞 密度を得るのが可能であった。

> 全醗酵を通して、細胞密度 (Witholt, J. Bacteriol. 10 9(1972)350-364)とポリマー形成量(第2項によ る)を、試料を取ることによってモニターした。

第5図Aは,対数増殖期(μmax=0.48)の間に,事 実上バイオポリマーの生産がないことを示す。しかし, 生育速度が、栄養源の1(この場合は窒素)の制限によ 20 り低下すると、ポリマー形成が始まる(最大で細胞乾燥 重量の15%)。

この窒素制限は、以下のように行った:

N制限:E* 培地は、2N KOHおよび1N H2SO4を添加するこ とによって,培養pHを調整して用いた。このようにする と,2mg/mlの細胞密度が達成され得る。

4.他の制限によるバイオポリマーの形成

シュードモナス オレオボランスを第3項に記載のよ うに前培養した。本培養には、制限する栄養源に依存し て、改変E * 培地を用いた:

30 P制限:E* 培地を40倍に希釈し、窒素をNL Clの形で17m Mまで加えて、用いた。培養pHは、2N KOHおよび2H HzSO4 で一定に維持した。この培地に存在するリン酸は、2mg/m 1まで、細胞増殖を可能にする。

S制限:E* 培地に,100mM MgSO4に代えて,ある量のMgSO 4を加えて最終濃度を0.4mとし、そしてある量のMgCl2 を加えて最終濃度を0.6mMとした。pHは,5%アンモニア を用いて調製した。この培地では、2ms/mlの細胞密度が 可能である。

No制限:E* 培地に,100mM NgSO4に代えて、ある量のMgSO 40 4を加えて最終濃度を0.1mMとし、そしてある量のMgSO4 を加えて最終濃度を0.9mMとした。pHは,5%アンモニア を用いて調製した。この培地では、1mg/mlの細胞密度が 達成し得る。

全醗酵の間、培養の細胞密度および生成ポリマーの量 を、上の第3項に示したように測定した。

これらの培地を用いることにより,ボマーの生成が種 に定常期に起こることが再び見られる。上記の制限に依 存して、細胞乾燥重量当りのバイオポリマーの百分率 は、第5図に示すように変動する。第5図Aは窒素の制 ED.0.7.)を60%空気飽和に、空気流入管のコンピュー 50 限、第5図Bはマグネシウムの制限、第5図Cはリン酸

塩の制限、そして第5図Dはイオウの性げを行った場合のものである。黒丸は細胞密度、そして白丸はバイオポリマーの量を示す。以下の表1は、これら栄養源制限の生成ポリマー量に対する効果を示し、細胞乾燥重量の百分率で示した。

表1:ポリマー生成に対する制限の効果

制限	ポリマー(%)
P	15
S	7 .
Иg	10
N	15

一般に、ボリマーの生成は、窒素とリン酸制限下で最良であると結論し得る。

5.他のパラフィンによるポリマーの形成

* 上記の第4項で述べたように決定した、ポリー3ーと ドロキシーアルカノエート生成の最適条件を用いて、他 のパラフィンを、ポリマー形成のための基質としての可 能を調べた。シュードモナス オレオボランスがCo~C 12のnーパラフィンで生育し得ることを示す文献がある ので、これらの化合物をまず調べた。

18

前培養の上を第3項のように行い、そして本培養を上の第4項の窒素制限条件で行った。細胞密度およびボリマーの百分率は、上の第3項に示すように測定した。

増殖およびボリマー形成の結果を第6図に要約する。 第6図において、使用されたパラフィンは、nーヘキサン (第6図A)、nーヘプタン(第6図B)、nーノナン(第 6図C)、nーデカン(第6図D)、nーウンデカン(第6 図E)、および nードデカン(第6図F)である。 黒丸は細胞密度を、そして白丸はバイオボリマーの量を示す。 表2は、ボリマーの最大生成量、この最大値に達する時間、および生成ポリマーのモノマー組成を示す。

表2:種々のn-アルカンに対してシュードモナス オレオポランス

により生成されるパイオポリマーおよびその組成

炭素源	ポリマ	酸醇時間				ポリマー組	成 (3)	:	
灰条伽	ーの量	(時間)(2)	3-0H-08	3-0H-C7	3-OH-C8	3-0H-C9	3-0H-C10	3-0H-C11	3-OH-C12
ヘキサン	1.2	22	1				·		
ヘプタン	6,7	22		1					
オクタン	12,5	31	0, 11]	0,89				
ノナン	9,2	27		0,33		0, 67	·		
デカン	12,5	31	0, 10		0,68		0, 24		
ウンデカン	8.4	54		0.23		0,63		0.14	
ドデカン	3,4	54	0,02		0.31		0.36		0.31

- (1) パイオポリマーの最大量であり、単位はg/g細胞乾燥重量。
- (2) バイオポリマーの量が最大に達する融酵時間であり、単位は時間。
- (3) バイオポリマーにおける種々のモノマーの相対的な組成:

3-0K-08:3-ヒドロキシ-ヘキサノエート

3-OH-C7: 3-ヒドロキシーヘプタノエート

3-OH-C8: 3-ヒドロキシ-オクタノエート

3-OH-C9: 3-ビドロキシ-ノナノエート

3-OH-C10:3-ヒドロキシ-デカノエート

3-OH-C11:3-ヒドロキシ-ウンデカノエート

3-OH-C12:3-ヒドロキシ-ドデカノエート

シュードモナス オレオボランスが全てのこれらパラフィンに対してボリマーを生成し得ることがわかる。最良の増殖基質であることが知られている基質、すなわちオクタンおよびノナンは、ボリマー形成に最良の基質でもある。ボリマーの組成は、用いた基質に依存する。炭素数が偶数のパラフィンで生育後、炭素数が高数のペラフィンで生育後、炭素数が奇数のパラフィンは、常に炭素数が奇数のモナマーとなる。これらモノマーは、常に3ーヒドロキシーアルカノエートであり、鎖長が基質の長さからGに変動する。CaおよびGeノマ※50

※一に対して、ポイマー生成酵素は最大の特異性を有する ようである。

6.オレフィンによるバイオポリマーの形成

シュードモナス オレオボランスは、またn-オレフィンを唯一の炭素源およびエネルギー源として利用できるので、バイオボリマーがこれらの基質でもまた形成されるかどうかを検討した。この研究のための醗酵は、上の第5項に従って行った。細胞密度およびボリマーの百分率は、第3項に示すように定量した。

これら不飽和パラフィンによって生育した後に生成し

たポリマーは、パラフィンポリマーとは異なった組成を 有するようになる。該生成ポリマーは,モノマーの一部 が末端二重結合を含むという点において異なる。

n-オクテンによって生成するポリマーの場合, この ような二重結合を有するモノマーの量は、全体の55%で あった。オクテンによって生成したポリマーの加水分解 物の典型点のGCスペクトルを第7図に示す。 ピークの最 初の集団は、3-ヒドロキシヘキセン酸エステルと3-ヒ ドロキシヘキサン酸エステルとの存在を示す。第2のピ ーク対は3-ヒドロキシオクテン酸エステルと3-ヒド 10 7.n-オクタン/1-オクテン混合物によるポリマーの形 ロキシオクタン酸エステルとの存在を示す。不飽和化合 物は,それぞれの場合において,GLC/MSで分析されるよ うに、より短い保持時間を有する。対応するピークを矢 印で示す。 オクタンおよびオクテンによって生成したポ リマーのIRスペクトルを第8図に示す。二重結合による ピーク (矢印で示す)が明瞭に見られる。

表3は,種々のオレフィンによって生育した後に生成 したポリマーの最大量、この最大値に達するのに必要な 時間,およびポリマーを構成するモノマーを示す。

表3:n-アルケンによって生育し たシュードモナス オレオ ポランスによるパイオポリ マーの生産

炭素源	ポリマー の量(%)	酸 醇時間 (時間)	モノマー (1)
n-オク テン	8, 0	25, 0	3-OH-6:0;3-OH-6:1; 3-OH-8:0;3-OH-8:1
n-ノネ ン	6, 3	24, 0	3-OH-9:0;3-OH-9:1
n-デセ ン	3, 4	26, 0	3-0H-8:0;3-0H-8:1; 3-0H-10:0;3-0H-10:1

(1):パイオポリマーにおける種々のモノマー成分

3-011-6:0:3-ヒドロキシヘキサノエート

3-01-6:1:3-ヒドロキシ-5-ヘキサノエート

3-0H-7:0:3-ヒドロキシへブタノエート

3-0H-7:1:3-ヒドロキシ-6-ヘプタノエート

3-QH-8:0:3-ヒドロキシオクタノエート

3-OH-8:1:3-ヒドロキシ-7-オクタノエート

3-01-9:0:3-ヒドロキシノナノエート

3-0H-9:1:3-ヒドロキシ-8-ノナノエート

3-OH-10:0:3-ヒドロキシデカノエート

3-0H-10:1:3-ヒドロキシ-9-デカノエート

3-OH-11:0:3-ヒドロキシウンデカノエート

3-011-11:1:3-ヒドロキシ-10-ウンデカノェート

3-OH-12:0:3-ヒドロキシドデカノエート

3-0H-12:1:3-ヒドロキシ-11-ドデカノエート

シュードモナス オレオボランスは,1-オクテン,1-オネン, および1 ーデセンによってバイオポリマーを生 成する能力があることが示される。しかし、ヘキセンに

た。ポリマーがこれらのモノマーから構成される様式 は、nーパラフィンによって生成するポリマーの場合と類 似している。しかし、1-デセンによる生育の間に形成さ れるバイオポリマーが,検出し得る量のGモノマーを含 んでいないことは驚きである。

20

試験した1-オレフィンによって得られた結果によれ ば,バイオポリマー形成が1-ヘプテン,1-ウンデセ ン,および1-ドデセンによっても起こることが期待さ れ得る。

1-オクテンによる生育の間、形成されたポリマー は、飽和モノマーおよび不飽和モノマーの両方を含むこ とが乱された。不飽和モノマーの量が、0 (オクタンによ る生育) と55% (オクテンによる生育;第6項参照) の 間のポリマーを生成するために、シュードモナス オレ オポランスをこれら2つの基質の混合物で培養した。

醗酵は,1℃の攪拌タンク反応容器で,第3項のように 行った。すべての場合に,全量20%の有機総を加えた。 20 細胞密度およびポリマーの百分率は、第3項に示したよ うに定量した。

表4は,二重結合を有するモノマーの割合が,用いた 基質の組成に依存してどのように変化するかを,モノマ 一組成と共に示す。示した値は、細胞のポリマー含量が 最大の時に測定した値である。

表4:1-オクテン/n-オクタン混合 物によって生育した後のシュ ートモナス オレオポランス によるパイオポリマーの生産

n-オクタ パイオポリン/l-オ マーにおけ クテン るC-C二 重		パイオポリマー組成		
,,,	結合の割合	6:0: 6:1 :8:0:8:1		
100:0	0,0	0.11:0 :0.89 0		
75:25	8.2	0.07: 0.001: 0.85 0.08		
50:50	18,4	0.06: 0.01 : 0.75 0.18		
25:75	30,2	0.03:0.01:0.67 0.29		
0:100	54.4	0.07: 0.07 : 0.38 0.48		

- パラフィンおよびオレフィンの混合物から出発する と、ポリマーにおける二重結合の百分率を変化させ得る と結論される。従って、生育基質の組成がポリマーのモ ノマー組成を決定する (部分的に)。
 - 8. 他の炭化水素によるポリマーの形成

n - パラフィン (第5項参照) および1 - オレフィン (第6項参照)によるポリマー生成に加えて、他の置換 炭化水素または不飽和炭化水素を炭素源とした場合に も、ポリマー生成が起こり得るか否かを検討した。シュ ードモナス オレオボランスは、全てのこれら基質に低 よって生育させた場合は,ポリマー形成が見られなかっ 50 構成を有さないかも知れないので,これら基質はn-オ

30

10

20

クタンとの1:1混合物で加えられた。

醗酵は、第3項のように、10の攪拌タンク反応容器 で、10~15%の有機層を用いて行った。

表5は、このようにして試験した基質、およびこの場 合に、種々のモノマーを有するポリマーが実際生成する か否かを示す。また、オクタン分解の第1中間体である 1-オクタノールが、生育およびポリマーの基質として 用い得るかどうかも調べた。これは、1-オクタノールを 唯一の炭素源およびエネルギー源として、シュードモナ スオレオボランスを培養した場合に見出された。

ポリマー生成が、またさらに酸化されたパラフィン (オクタノール、オクタン酸)による生育の間にも起こ ることが期待される。

表5:他の炭化水素による生育の間 のシュードモナス オレオポ ランスによるパイオポリマー の形成

基質	パイオポリマー形成	生育'
nーオクタン	+	##
1ーオクタノール	+	#
2ーオクテン	+	+
2ーメチルー1ーオクテン		##
1ーオクチン	_	+
4ーオクチン		+
1,3ーオクタジエン		+.
1,4ーオクタジエン		+
2,2-ジメチルヘプタン		+
2,2-ジメチルオクタン		#
2ーオクタン	-	-
nージプチルエーテル	+	+

- 1 "生育"で示した欄における記号は、次の意味で ある:
 - 生育しない。
 - + 最終00値が1と5の間である中程度の 生育.
 - **# 最終00値が5と10の間である適度の生育。**
 - **卌 最終00値が10を越えるオクタンによる生** 育に匹敵する良好な生育。

9.他の菌株によるオリマーの形成

上に述べたすべての実験は、シュードモナス オレオ ボランスTF4-IL (ATCC 29347)を用いて行った。この 菌株は、時々GPo-1と呼ばれる。この野性型に加え て、数多くの関連菌株を、オクタンまたは1-オクタノ ールによる生育後のポリマー形成について調べた: GPo-12:OCTプラスミドを保持しないGPo-1, PpG-1:シュードモナス プチダ、Chakrabartyにより単 離されたものでプラスミドを含まない。

PpG-6:0CTTプラスミドを保持するPpC-1, Miller and Agrania rest. 22

PpS-124:CAM/OCT融合プラスミドを保持するPpG-1。 これらの菌株は、250mlのエーレンマイヤーフラスコ中 の50mlE* 培地(第3項参照)で,4%オクタン, または0 ロプラスミドがない場合には、4%1-オクタノールを、 唯一の炭素源およびエネルギー源として用いて試験し た。

表<u>6</u>:CPoー1関連菌株によるポ リー3ーヒドロキシオク タノエートの生産

菌株	757	スー基質	ポリマーの量(%)(1)		
18974	プラス ミド	基 其	50×1の培 養物中	プレート 上	
GPo−1	OCT	オクタン	5,9		
GPo−1	OCT	1ーオクタ	2,9	-	
GPo−12	_	1ーオクタ ノール	-	6, 1	
PpG—1	_	1ーオクタ ノール	7.7	24,8	
PpG-6	OCT	オクタン	1.8		
PpS-124	CAM/OCT	オクタン	0.02	+(2)	

(1): 細胞乾燥重量あたりの百分率であるが、絶対的 な最大値ではない。

(2): 明らかに検出可能。

ート (PHB) の値も示す。

プラスミドを保持しない株、すなわちPpG-1が、細 胞内にポリー3ーヒドロキシアカノエートを蓄積する事 実から、ポリマー合成に関与する酵素がプラスミドでは なく、染色体にコードされれていると結論し得る。

得られた結果は、またアルカノール、アルデヒド、カ 30 ルボン酸, ジアルカノール, ジアルデヒドおよびジカル ボン酸を単一炭素源として用いる場合にも、ポリマー生 成が起こることを証明するか、あるいは示唆する。 10.ポリー3-ヒドロキシアルカノエートのポリマー特

精製ポリー3-ヒドロキシオクタノエート-3-ヒド ロキシヘキサノエート (PHOH) および精製ポリー3-ヒ ドロキシオクタノエート-3-ヒドロキシオクタノエー トー3ーヒドロキシヘキサノエートー3ーヒドロキシヘ キサノエート (PIDIU) の分了量 (MW) 、融点 (Tm) お 40 よびガラス転移温度 (Tg) を決定した。得られた値を表 7に示す。比較のために、ポリー3ーヒドロキシブチレ

23 表7:ポリマーの特性

ポリマー	MW(g/mol)	T _m (°C)	Tg(℃)
PHB	8.0×10 ⁵	167	-4
PHOH	2.8×10 ⁵	56	-35
PHOHU	2.8×10 ^s	_*	-35

* ーは、この場合、ポリマー物質が完全に非結晶性なので、融点が存在しないことを意味する。

(発明の要約)

本発明は、シュードモナス オレオボランス細菌を、ある栄養源を含む基質で培養することによってポリエステルバイオボリマーを生成する方法に関する。該ポリエステルの性質は、用いる炭素源の性質を変化させることにより変化させ得る。このようにして、不飽和二重結合を有するポリエステルをも生産し得る。該ポリエステルから光学活性なカルボン酸またはエステルが生産される。該ポリマーは、経糸、フィルム、皮膚および骨移植材などの製品を製造するのに利用し得る。

【図面の簡単な説明】

第1図は本発明方法により生産されるバイオポリマーの

構造単位の一般式を示す。

第2図Aは、オクタンで生産されたバイオポリマーのガスクロマトグラフィー (GLC) 、そして第2図BおよびCは、マススペクトル (NS) の結果を示す。

24

第3図はシュードモナス オレオボランス培養物の試料中におけるバイオポリマーの定量分析の結果を示すグラフである。

第4図はポリー3ーヒドロキシアルカン酸エステルの分析において、用いた細胞量に対する相対GLC応答のプロットである。

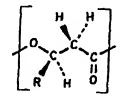
第5図A〜Dは、培地中の栄養源制限と、nーオクタンを 用いたときのバイオポリマー生産との関係を示す。

第6図は、窒素制限下で種々のnーバラフィンにおいて 増殖したシュードモナス オレオボランスによるポリー 3ーヒドロキシアルカ酸エステルの生産を示す。

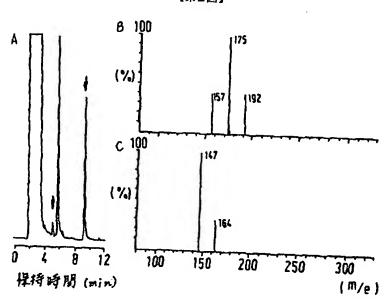
第7図は1-オクテンで増殖したシュードモナス オレオボランスにより生成したバイオポリマーのGLC分析の 結果を示す。

第8図はオクタン(第8図A)とオクテン(第8図B) 20 とで生成するバイオポリマーの赤外スペクトルを示す。

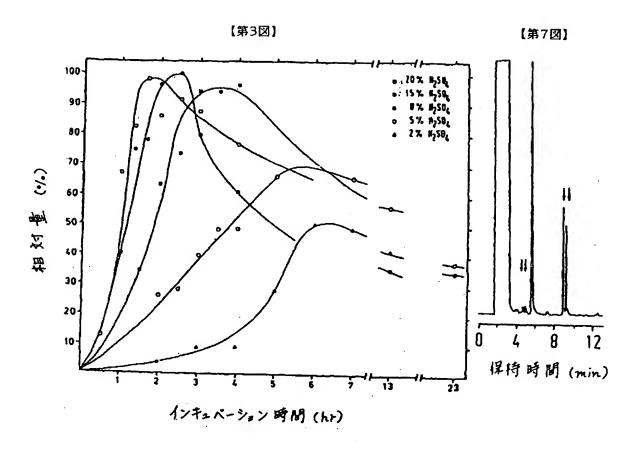
【第1図】

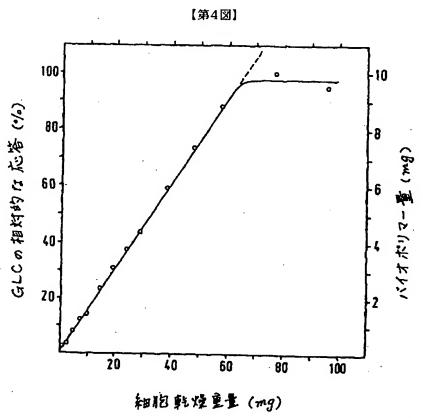


【第2図】



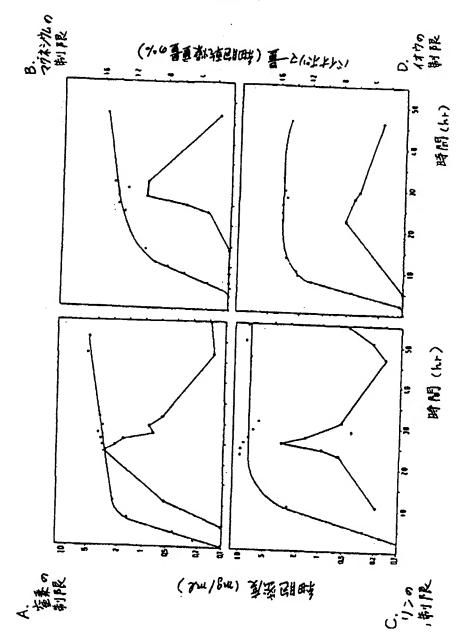
BEST AVAILABLE COPY



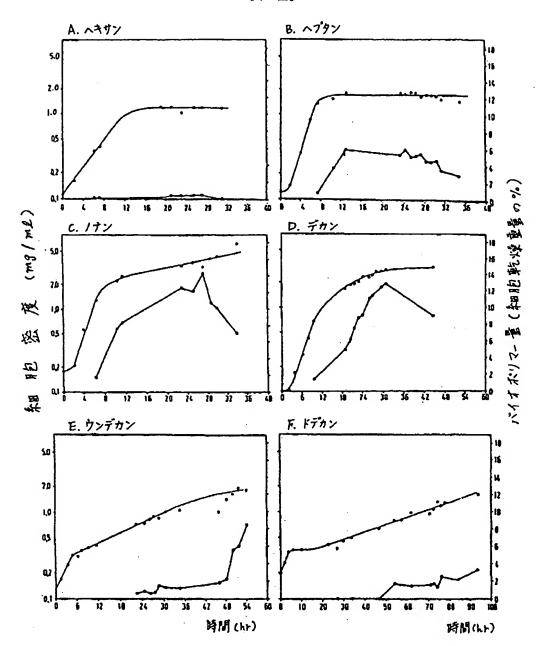


BEST AVAILABLE COPY

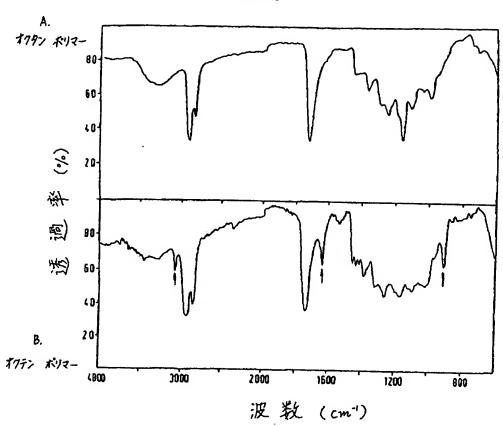
【第5図】











フロントページの続き

(51) Int.Cl.6 C08L 67/02 (C12P 7/62 C12R 1:38)	識別記号 LPD	庁内 整理 番号	FI COSL 67/02	LPD	技術表示箇所
---	-------------	-----------------	------------------	-----	--------

BEST AVAILABLE COPY